

平成 30 年度 大阪国税局長賞

幸せの有りよう

桜井市立桜井中学校 二年 萩原 叶女

「症状が進行しています。紹介状を書きますので、一度専門医に診てもらって下さい。」
経過観察のつもりで訪れた整形外科でそう告げられた時の事は、今でもはっきり思い出す。
まさか。大丈夫。大丈夫かな。予期せぬ扉が目の前に突然開いたようで、中は暗いのに足を踏み入れなければならない感じがした。

早速、病院の予約が取れた。私のレントゲン写真を前に医師の説明はこうだった。私の症状は、特発性側弯症。脊柱が曲がっているため、進行防止の装具治療が必要で、これ以上進行すれば手術を勧めるのだという。突然の事に診察室にいた母と私は呆然とした。今まで通りの生活が出来るのだろうか、これからどうなってしまうのだろうか。戸惑いと不安ばかりが先行したが、現代の医学では治療のためにコルセットのような装具を着けるのが望ましいという事は理解した。そして、私の体に合わせて装具を作成してもらう日取りが決まり、それからは毎週病院に通った。程なくしてオーダーメイドの装具が完成し説明を受けている時、私はとても驚いた。その金額がとても高額だったからだ。しかし、装具士の方が、

「この費用は、国民健康保険でほぼ全額還付されます。」

とおっしゃった。私一人が使うもので、公共の施設や物品などではないのに、税金で賄われるのだ。両親は、突然支払わなければならなくなった金額が健康保険で賄われる事がとても有難いと話していたが、私は、働いて健康保険料を納め続けてくれている父にも感謝した。

私の装具治療が始まって約八ヶ月が過ぎた。装具を着けている状態ではいけない事はないけれど、動きが制限されるために自ずと出来ない事がある。私は当時吹奏楽部に所属していたが、続けていけるかどうかをととても思い悩んだ。装具を着けて熱のこもった体で、クーラーのない夏の音楽室での練習に耐えられる自信はなかった。吹奏楽部を辞め、治療に専念しよう。それが私の精一杯の決断だった。そして今は自分探しをしている。学校から帰って空いた時間は、大好きな音楽を聴いたり、本を読んだり、絵を描いたりして過ごしている。中学校に入学してはじめて思い描いた生活ではなくなったけれど、装具治療を始めて気付けた事もある。病院には、病気を治そうと頑張っている人達が大勢いるという事。そして、多くの人々の善意ある納税で成り立つ健康保険制度のおかげで、より健康で安心出来る生活が送れるという事。そして、それは社会全体で支え合っているという事。私の治療は、成長が止まり骨が成熟するまで続く。その間、この装具を大切に使って治療を完了させたい。そして大人になったら、納税で誰かを助けられる人になりたい。